島根県の実情について

舟木哲朗

島根県には、現在幼稚園が六十数園ある。このうち、国立一園と私立若干園のほか、大部分は公立である。数年前までは、幼稚園の分布が都市部（特に東部）に集中していたが、最近は、全県下にわたって、しかも郡部に続々新設を見ている。該当年令幼児の就園率は約二十パーセントで、全国平均とほぼ等しい。

公立幼稚園は小学校に併設のものが多く、園長も専任は二名（男一、女一）で、他は大部分が小学校長の兼務になっている。

島根県における幼稚園の大きい特徴は、次の四点である。

1. 国公私立の間に、その内容や質や経費（保護者負担）の差がみられない。また、対立を作るような「溝」がない。

「島根県幼稚園教育研究会」という単一組織に全部が加盟していて、公私立別の組織はない。

2. 保育所との間に「溝」がなく、連絡や協力がうまくおこなわれている。地域によっては、幼稚園と保育所が合同で組織している「保育研究会」もある。

3. 小学校との連絡が緊密で、幼小一貫の「幼年期教育」研究が推進されている。

4. 研究意欲が旺盛で、特に園の壁を越えた共同研究が盛んに進められている。

以下、研究の面を中心にして、島根県の幼稚園の現況を簡単に紹介する。

一、県単位のもの

「島根県幼稚園教育研究会」がすべての推進力になっている。この会がおこなう主な研究行事は次の通りである。

1. 研究指定園の指名と援助

毎年研究指定園を一園指名し、一万円の補助を与えて研究させる。指定された園は、研究のテーマを決定し、それに基いておこなった研究結果をまとめて、その年度内に研究会を開催する。（会期は二日間）

2. ブロック研究の推進

県内を五つのブロックに分け、各ブロック別の自主的な研究をさせる。そして、右の研究会において、各ブロックの研究結果を発表させる。

3. 幼児教育振興大会の開催

主として保護者を中心として、各ブロックで一か所ずつ会場を

設け、講師に巡回講演をしてもらう。なお右のブロックのほか、県内で幼稚園の設置されていない地区にも一会場設け、幼稚園の設置を呼びかける。

4. 園長、主任研修会

一般の研究会は、幼児の教育内容や方法を中心としているので、主として経営を中心とする園長、主任の研修会を毎年もっている。(会期は二日間)

二、ブロック単位のもの

右の2について、各ブロックで自主的におこなう。

三、市町村単位のもの

「島根県幼稚園教育研究会」の下部組織としてではなしに、市町村単位で別に組織がある。例えば、安来市では保育所と合同で「保育研究会」を組織しているし、松江市では「松江市幼稚園教育研究会」がある。

市町村単位のものは、その組織や構成メンバーなどによって、それぞれ内容に違いがある。ここでは、一つの例として「松江市幼稚園教育研究会」の活動をあげてみよう。

1. 班別研究

市内幼稚園の全職員がいずれかの班に所属し、毎月一回定例の研究会をもっている。今学年度は、「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」の四班が活動している。班別研究の成果は、年度末に総会で発表される。ちなみに、昭和三十二年度には健康班では「運動」のカリキュラムを作った(幼児の教育昭三十二・十月号参照)し、音楽リズム班では、言語班と共同で、教材として使用する幼児用の歌を約二十曲新作(作詞および作曲)し、発表した。このほか、言語班では、NHKのアナウンサーを講師として毎月共通語の実習をおこなったし、絵画製作班では、やきもの・そめものなどの見学や実習などをおこなったり、カリキュラムを構成したりした。

昭和三十三年度においても、各班それぞれ特徴のある活動をおこなっているが、中でも言語班では、活版刷りのりっぱな機関誌「いずみ」を編集し発行している。

以上は、全く各班の自主的な計画による活動である。

2. 研究発表会(個人研究)

毎年二回、市内の研究発表会をもっている。これには必ず各園からひとりずつ発表することになっていて、しかも毎回必ず発表者を変えることになっている。したがって、市内のだれもが研究発表の経験をもつことになる。

3. 小学校との一貫研究

松江市では、ここ数年来、幼稚園と小学校低学年とを結ぶ「幼年期教育」の研究が推進されている。全体の組織としては、保育所なども含めた「松江市幼年期教育研究会」という一本の団体があるが、実際面では、幼稚園または保育所と、そこから進学する

小学校との間に、常時、合同の研究会がもたれている。

四、園単位のもの

各園は、必ず何らかの形で研究の組織をもっている。その組織は大別して次の二種類となる。

① 全園が共通のテーマをとりあげ、園をあげて共同研究の形をとるもの。

② 個人研究を中心とし、それをお互いに援助し合い、発表し合う形をとるもの。

松江市内の幼稚園では、以前は①の形が多かったが、最近は②の形をとるものが多くなった。一例として、島根大学教育学部付属幼稚園の今学年度の研究推進状況を簡単に紹介してみよう。

○ **共通テーマ**　二年保育児の指導

○ **個人テーマ**

- 二年保育のカリキュラム構成　舟木　教諭
- 「自然」の指導、特に環境構成　小林　教諭
- 視聴覚教育、特に放送聴取指導　佐藤　教諭
- 絵本の指導　田中　教諭

以上はいずれも共通テーマとの関連において、年令別に考察が進められている。そして、その中間報告を「研究紀要第二号」（昭三十三・十・十八）にまとめた。

これらをまとめるにあたっては、園内で数回の発表と討論をおこなったほか、付属小学校の低学年担任教官と該当教科担任教官との間にも数回の発表と討論をかさねている。

○ **研究保育実施**　園内での研究保育を随時実施し、それを中心とした討論の会をもっている。そしてそれには付属小学校低学年担任教官と該当教科担任教官の参加を得ている。

○ **小学校の授業参観**　右の研究保育と同じ要領で、小学校低学年で実施する研究授業に参加している。

○ **小学校との交換授業**　小学校低学年の担任が幼稚園の保育をおこない、幼稚園の教官が小学校低学年の授業をおこなうという、いわゆる「交換授業」を、幼・小の間でおこなっている。その結果をお互いに発表し合い、討論している。

以上ごく簡単に概況だけをまとめたが、研究の成果（質）は別として、その意欲においては、決して人後に落ちないものを持っているものと自負している。国公私立の別なく、園の壁を越えて、みんなが一致協力して研究を進めているという点でも、誇り得るものをもっていると思う。

昭和三十四年度は、島根県幼稚園教育研究会の創立十周年を迎える。過去十年間の前進のあとをかえりみて、今日までに到達している研究の成果を広く天下に問う計画も進められている。

（島根大学付属幼稚園）